



履修科目

Introduction to Tropical Agriculture (3 単位)

Principles of Tropical Agronomy (3 単位)

Foundation English II (3 単位)

Principle of Biology (3 単位)

授業から学び得た専門的な内容について

Biology の授業はマーク形式だったので生き物の分類名や人間の神経系について単語を覚えた。この授業では高校のときに習ったような生物の内容をさらに詳しく細かく学んだ。例えば、私が以前聞いたことのある“体内のある器官の機能低下による病気や生まれつきの異常”について、どういう原因で起こることなのかと探求心が刺激される内容だった。タイならではの授業内容ではなかったため、自分が興味を持てるテーマ、例えば生物の元々の発生や進化、生物の生息地や共生生物との関係などについて優先的に詳しくなれるように復習をした。

Agronomy や Tropical Agriculture の授業では 単語を覚えるより、仕組みや言葉の定義を自分の持つ英語の語彙で説明することに努めた。例えば、どうやったら一定面積内での作物の収量を増やせるのか、熱帯地域ではどんな栽培体系があるのかということです。

英語文法の授業では、高校で習った英文法を英語で教わるもので、内容は知っているけど先生のネイティブな英語を聞き取るトレーニングとして興味深い授業でした。授業ではグループワークやプレゼンテーション、ビデオ作成や英作文の課題があり、自分の英語力を見直す機会がたくさんあった。

自らの専門分野との直接的または間接的な関連性について

私の専門分野との直接的関連性は、熱帯地域の人々の食物や農法、日本と同じような農業従事後継者の不足を授業で学んだことだと思う。また、日本とタイをはじめとする熱帯地域の国々との良好な関係や共にビジネスをする実態も自分の目で確かめられた。間接的には、英語の授業を受けることで英語に慣れ、日々の生活でも異文化を肌で感じ、自分の目を日本より外にも向けることができたことだと思う。英語の力をつけて、この経験があったから将来仕事をするときに海外営業や研修の機会があれば自信を持って挑めるということに繋がると思う。

海外の大学で授業を履修するにあたって工夫した点

―耳が慣れないうちは先生の話を録音して後で何度か聞いて復習する。

―少しは自分が知識のある分野の授業を選び、まったく内容が分からないところから入るのを防ぎ、英語に慣れることに集中するようにした。それでも知らない英単語や知識は多く、英和辞典を多用し、分からないことはその都度こまめに調べた。

―試験の形式が授業によってある程度分かっていたため、マーク形式のものは単語を覚えることをメインに、記述形式のものは物事の仕組みを覚えることをメインに勉強した。

―日本での授業と違うところは言語が違うことに加え、授業の長さが3時間であること、そして私にとっては、同じ授業で毎回テーマが変わることが珍しく、その点で試験での対策は立てやすかったのではないかなと思う。

理学部化学コース E.I.



履修科目

Introduction to Tropical Agriculture (3 単位)

Principles of Tropical Agronomy (3 単位)

Foundation English II (3 単位)

Introductory Applied Mathematics (3 単位)

Principle of Biology (3 単位)

授業から学び得た専門的な内容について

熱帯農学の基礎的な授業では、まずタイ、ラオス、ベトナム、カンボジアなどの気候や地理を学び、その発展として農作物や水産業などについて学んだ。一番印象に残った分野は土壌の分野であり、今の専門である化学と結びつくような内容であった。農業経済の授業では、農作物の種の種類や利用法などを学び、さらに耕作の仕方についても学ぶことができた。また、インフォメーションや遺伝子学などの講義もあり、農学の授業であるが、化学や生物の専門的知識を融合したような授業展開であった。基礎的な知識を得るための授業だったが、内容が農学、化学、生物、物理などの広い範囲の知識を必要とする分野だった。数学では、微分積分などの計算を学んだ。基礎生物の分野では、DNA などの遺伝子について復習をすることができ、分類学などの新しい専門知識を得ることができた。また、卒業研究で扱っている酵素についても英語で講義を受けることで研究に生かすことが出来る知識を得ることができたと考えている。英語の授業では、コミュニケーションをとることが一番重要視されており、それに付随する形で文法などの説明があったために、英語でのコミュニケーション能力を身につけることが出来たと思う。

自らの専門分野との直接的または間接的な関連性について

自分の研究は酵素の反応機構の検討であることから、生物の授業で得ることが出来た知識は今後の研究生活で大きく生かすことが出来ると思う。また、2015 年の生理学・医学賞を受賞した大村教授の熱帯感染症の特効薬開発の研究などからわかるように、化学と熱帯農学は直接的または間接的な関連性を持っているために理学部からでも農学を専門とする留学プログラムに参加することは研究生活において重要であったと考える。

海外の大学で授業を履修するにあたって工夫した点

英語の専門用語が多いため、授業後にその日配られた資料などの復習を行った。知らない単語や重要な単語はノートをつくり、その単語帳ノートをテスト前の復習につかっていた。また、授業と平行して英語の文法の勉強もしていた。中間、期末などの定期テストでの記述問題では専門単語はもちろん、長文を書くスキルも必要になると考え、英語の勉強も平行して行っていた。

理学部学際理学コース A.K.



履修科目

Biocontrol and Habitat (3 単位)

Plants in the Landscape (3 単位)

Principles of Landscape Architecture (3 単位)

Landscape of Agriculture (2 単位)

授業から学び得た専門的な内容について

タイの農業については、高校の地理で「浮稲」「世界最大の米の輸出国」「緑の革命」などのワードで教わったことを覚えていました。そのワードから、単価が安い農作物を大量に輸出することで外貨を得ることがタイの農業戦略だと認識していました。Introduction to Tropical Agriculture の授業などでも同様のことを学びましたが、さらに掘り下げた内容を学びました。タイは現在でも薄利多売の方法で農作物を輸出することで外貨を得ていますが、単価の高いものを売れるようにすることで、薄利多売からの脱却もにらんでいるということを学びました。より具体的に言うとブランドを確立させることによって付加価値の高い商品を販売できるようにすることで、収入を上げられるようにしたいと、そのお手本が日本のブランド農作物だということも教わりました。例としてあげたブランドが神戸牛で、先生が「コウベビーフ、コウベビーフ」とずっとおっしゃっていたのが面白かったです。緑の革命についてもタイでは大きな失敗として捕らえられており、身の丈にあった持続可能な農業というのが近年のタイの大きなスローガンであることを学びました。持続可能性、ブランド農作物以外にも、農業機械の分野でも日本は大きくリードしており、タイの農村地帯ではいたるところで KUBOTA の文字を見ることが出来るということを学び、また実際に実習で行った別のキャンパス内の農場ではいたるところに見られました。

自らの専門分野との直接的または間接的な関連性について

現在化学系の研究室で研究を行っています。タイで受講した、「Introduction to Tropical Agriculture」「Principle of Biology」「Principle of Tropical Agronomy」の3つの授業はオムにパス形式であり、土壌、微生物、遺伝子工学、環境保全、農業機械、農村の教育の振興などいろいろな分野の専門の先生が、それぞれの分野についての基礎的な事項を授業してくださる形式でした。そのような授業において、化学に関しての基礎的な知識は、特に土壌学や分子生物学についてなどでとても役に立つと感じました。化学は多くの応用的な学問の基礎として関連しているということがわかりました。

海外の大学で授業を履修するにあたって工夫した点

大学ではパワーポイントを用いて授業する先生が多く、また授業で使うそのパワーポイントをレジュメとしてプリントアウトして授業前に配ってくださることが多かったです。そのため、先生の話聞きつつ、次に話す部分のスライドを先に見て、あらかじめわからない単語などを調べておくということをよくしていました。また、予習がしにくいのでその分復習に力を入れて学習しました。そのためにも、授業中先生が重要だといったところはプリント中で目立つようにしておいたり、レジュメ中のどこを話してどこを話さなかったかということを忘れずにメモしたり、メモし忘れたら友達に確認したりしました。